

## Mahāvastu における ava-√lok の用例

## —誰が何を観察するか—

左藤 仁宏

## 1 問題の所在

本研究は仏教文献において頻出の語である、古代インド語の ava-√lok という動詞の用法を問題とするものである。

ava-は「下方」を意味する接頭辞、√lok は「開けた空間」を意味する名詞 “loka” に由来する「見る」程の意味を持つ動詞語根であり、この複合形が ava-√lok という梵語動詞である<sup>1</sup>。その過去受動分詞を有する“Avalokitasvara/Avalokiteśvara”という菩薩の名前を「観音」「観自在」と漢訳する場合などのように、この ava-√lok という動詞は「観」などと漢訳されることが多く、この動詞が「観る」程度の意味を有することは疑いえない<sup>2</sup>。

この動詞に研究者の関心が集まるのは、殆ど常にこの観音菩薩の名称の起源を巡る議論においてであり<sup>3</sup>、それらの先行研究は観音菩薩という尊格の性質を語る文脈の上でこの ava-√lok という動詞をとりあげてきた。そしてこの語が余りにもポピュラーなものであるがゆえか、先行研究においては、ava-√lok という語は常識的に「見る、観察する」程の意味として処理されるばかりであった。ここで筆者は、仏教徒に用いられるこの動詞が「観る」という表面的な意味合い以上に、より深いニュアンスを有している可能性を感じた。これを検討するためには、ある程度の量の用例からこの動詞を論じるという手順が必要であると思われる。しかし、かなりの程度この動詞それ自体を問題とした Zimmer [1922] や von Staël-Holstein [1936] といった先行研究も、十分にこれに着手していなかった。

そこで本研究では、仏教徒の用いる ava-√lok という動詞のニュアンスを正確に掴み取る為に、ある程度の分量を伴った具体的な用例精査を行いたいと思う。この種の用例研究は、網羅的にインド仏典を調査するものでなくては一定の有効性がないという批判も可能だが、ここではひとまずその範囲を説出世部の仏伝文献 Mahāvastu (=Mv) に限定し、この動詞の用例を調査する。そしてその時、これまで見落とされがちであった以下のような事柄に注意して、それら用例の整理を目指す。すなわち、この動詞はどのような文脈で用いられるか、この動詞の行為主体・行為対象にはどのような語が置かれるのか、Mv には仏伝・ジャータカ・経など、異なる性格を持つテキストが多様に含まれるが、どの箇所でもどのような用いられ方をするのかという点である。これらの問いを抱きながら、本研究は用例を取り扱っていく。

そして結論として、この ava-√lok という動詞が「観る」程の意味を持つとき、その行為主体（観察主体）が仏・菩薩といった仏教的世界観における上位者であるのに対して、行為対

<sup>1</sup> ava-という接頭辞については Schneider [2004], loka や√lok については Gonda [1966], Mayrhofer [1992: 480-481, s.v. LOK, loka] などを参照。

<sup>2</sup> 観音菩薩の名称の漢訳については辛嶋 [1998], Karashima [2017] が詳しい。

<sup>3</sup> de Mallmann [1948: 59-82], 斎藤 [2011, 2013] などは、観音菩薩の名称を巡って ava-√lok という動詞を論じている典型といえる。

象（観察対象）は主体よりも下に位置する世俗・世間といった俗的属性を帯びる傾向が一般にあるらしいことを示したい。この推論は、ava-が「下方」を意味する接頭辞であり、ava-√lok が「見下ろす」という語感を出させうるものであることを思えば決して不自然なことではない。そしてさらに、この動詞のその性格がMv の仏伝箇所では顕著である一方、ジャータカの箇所では必ずしも通用しないことを指摘したい。

なお用例調査には E. Senart による Mv 校訂本を用い、その校訂本に現れる ava-√lok の用例を取り上げる。しかし、近年 Senart の校訂本には少なくない問題が指摘されている<sup>4</sup>。そこで、Senart の校訂に看過できない誤りがある場合、Mv を伝える写本のうちで最古かつ最重要であると評される Sa 写本の異読から修正を施し、筆者がより適切な原文であると判断したものから用例を訳出、整理するものとする<sup>5</sup>。

## 2 用例整理の準備

### 2.1 apa-√lok と o-√lok

*A Critical Pāli Dictionary* (=CPD, s.v. apa-loketi) が述べる所によれば、巴語 ava-√lok, o-√lok, apa-√lok のこれら三つの動詞は混同されて用いられることがあるという。梵語の接頭辞 ava-, apa-が巴語の接頭辞 o-と交代することが頻繁であることを考えれば<sup>6</sup>、巴語における ava-√lok, apa-√lok, o-√lok の三者の混同は自然な現象に思われる。このような理解を踏まえて、von Staël-Holstein [1936] によれば、仏教梵語 ava-√lok は巴語の apa-√lok に相当する「許可を求める、暇乞いをする」という意味のものと、巴語の o-√lok に相応し「観る」と訳出できるものに二分できるという。Cone [2001: 168, s.v. apaloketi. 589, s.v. oloketi] もまた同様に、これら巴語 apa-√lok と o-√lok と仏教梵語 ava-√lok の対応関係を記している<sup>7</sup>。以上のことを踏まえながら、本稿における ava-√lok の用例整理のため次の図を描きたい。

仏教梵語	巴語
ava-√lok	Corr. apa-√lok. 許可を求める, 暇乞いをする. Cf. <i>Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary</i> (=BHSD, s.v. avalokayati) , Cone [2001:168, s.v. apaloketi] .
	Corr. ava-√lok, apa√lok, o-√lok. 観る, 観察する. Cf. Cone [2001: 168, s.v. apaloketi, 252, s.v. oloketi] , CPD (s.v. o-loketi) .

巴語においては ava-√lok, apa-√lok, o-√lok の混同が頻繁であり、意味の重複も大きい以上、仏教梵語の ava-√lok を巴語の apa-√lok と o-√lok の二つに完全に還元してしまうという von Staël-Holstein [1936] の理解は、幾らかの困難を抱えていると思われる。本稿では、用例整理のための作業仮説として、「観る」と解釈することが困難な、巴語 apa-√lok 「許可を求め

<sup>4</sup> Cf. Yuyama [2001], 平林 [2014] .

<sup>5</sup> Sa 写本については Yuyama [2001] を参照.

<sup>6</sup> Cf. Geiger [1994: 14, §26.2; 21, §28.2] .

<sup>7</sup> BHSD (s.v. avalokayati) も仏教梵語 avalokayati と巴語の apalokayati の対応を指摘する.

る、暇乞いをする」によく対応する ava-√lok の用例と<sup>8</sup>、「観る」と解釈しうる ava-√lok の用例とを二分しながら、Mv における ava-√lok の用例を見ていきたい。

## 2.2 用例抽出の基準

また用例抽出に際して、筆者のとり手段についていくつか断りを入れておきたい。先ず、前項で述べた通り、ava-√lok の用例を確認するにあたっては、特にその行為主体と行為対象に注意を払いながら行う。次に、次項で用例を抽出するにあたっては、vyava-√lok などの ava-√lok に準じると思われる動詞も同様に扱う。そしてその際には、同一文脈での繰り返し表現などは一つの用例として扱うものとする。

また、Senart の Mv 刊本に見られるもののうち ava-√lok の用例として扱うに相応しくないと筆者が判断したものは取り上げない。Mv に含まれる二つの「観察経」のコロフォンと、より小さい方の「観察経」の中で「観察経」自体を自己言及的に“avalokitam nāma vyākaraṇam”と呼ぶ箇所であvalokita という語が確認されるが、これらを本稿では扱っていない。これらの箇所では、ava-√lok は固有名詞として機能しており、ava-√lok の行為主体と行為対象を調査する本稿の企図においては、用例として適切ではないと思われるからである<sup>9</sup>。また Mv ed. Senart III 184.12 において oloketi が<sup>8</sup>、Mv ed. Senart I 317.8; 317.11; 318.12 において oloketvā と avaloketvā の語が確認されるが、これらも本稿の取り扱う用例から省いた。何故ならばこれらの語は、写本に記されていないにも関わらず Senart が新たに書き加えた、校訂者による創作と評して差し支えない記述だからである<sup>10</sup>。

用例表では、繰り返し表現など同一の文脈で何度も ava-√lok が用いられる場合には、煩瑣を避けるため、それをまとめて一つの用例として同一の項目に載せた。また簡便のため、「ペ

<sup>8</sup> von Staël-Holstein [1936] は、この「許可を求める、暇乞いをする」程の意味を持つ apa-√lok を、「分離」を意味する接頭辞 apa-に由来して“freedom of action”と換言できるとして、o-√lok との区別を主張する。

<sup>9</sup> 二つの「観察経」の内、より分量の少ない方の「観察経」のコロフォンには「観察と名付けられた経を終える (Mv ed. Senart II 293.15: avalokitam nāma sūtram samāptam, Sa 211a.6: avalokitasūtram samāptah. )」とあり、分量の多いもう一方の「観察経」のコロフォンには「観察と名付けられたマハーヴァストウの附録を終える (Mv ed. Senart II 397.7: avalokitam nāma sūtram mahāvastusya parivāram samāptam (Sa: sāptam) // )」とある。いずれも固有名詞として機能している。また、小さい方の「観察経」では天子が世尊の説法を願う箇所「世尊よ、過去の如来・正等覚者たちによって説かれた、過去に説かれた観察と名付けられたこの記別を、世尊もまたこの場で比丘たちにお説きくださいませ (Mv ed. Senart II 258.13–15: ayam bhagavām (Sen: bhagavan) avalokitam nāma vyākaraṇam purimakehi tathāgatehi (Sen: -gatehi arhantehi) samyaksambuddhehi bhāṣitam ca bhāṣitapūrvam ca // sādhu bhagavām pi etarahim bhikṣuṇām bhāṣeyā (Sa: -rahim bhikṣūnām bhāṣeya) / )」などとあるが、この場合も avalokitam (観察) の語は固有名詞として用いられている。

<sup>10</sup> Mv ed. Senart III 184.12 の oloketi の用例については、Senart 校訂本には次のようにある。「彼はその少女にあるときあるところで拒絶された。〔彼女は〕彼を見なかった (Mv ed. Senart III 184.10–12: so dāni taye mānavikāye kasmimicid eva sthāne kimcit kalam avasādito abhūṣi na tam oloketi / )」。しかし、下線を引いた oloketi の語は、Senart の参照した B 写本では ālaṣeti, M 写本では ālesati と記されていた語である。この箇所について、Sa 写本 332a.5 は ālaṣeti を示し、Sb 写本 347b.9 は ālaṣeti を示す。B 写本と Sb 写本の示す ālaṣeti (求める) が文脈に適した最も穏当な読みであろう。Senart 校訂本の示す oloketi は校訂者による過度な修正であり、この箇所は「彼はその少女にあるときあるところで拒絶された。〔彼女は〕彼を求めなかった」程の理解が相応しい。それ故、本稿ではこの箇所を ava-√lok の用例とは見なさない。同様に、Mv ed. Senart I 317.8; 317.11; 318.12 における oloketvā と avaloketvā の語もまた、いずれの写本にも見られない記述であり、調査対象にする必要はない。

ージ数」の項目に載せた題名については、Mv の全訳である平岡 [2010a, b] による。{ } で題名を囲っているものは、平岡氏が Mv 全体の文脈から見て不相応であると見なしたものである<sup>11</sup>。

### 3 ava-√lok の用例

#### 3.1 「観る」以外の ava-√lok の用例 (Corr. apa-√lok)

- 用例 0 「アナンガナ本生活」 Mv ed. Senart II 272.7–8.

王は〔それを〕聞くと悲しみ、次のような〔思いが〕生じた。「長者アナンガナは私に尋ねもせず (aprcchitvā), 許可を求めることもせず (Sa: anavaloketvā, Sen: *anavalokitvā*), 〔私を〕重んじず、世尊の傍に近づき、世尊を招待した。これはよくないことだ」<sup>12</sup>

ここでは、*anavalokayitvā* という語が「尋ねもせず (aprcchitvā)」という語と並列されていることから、ava-√lok が巴語の apa-√lok 「許可を求める」に相当する用法で用いられていることが分かる。これは von Staël-Holstein [1936] が巴語 o-√lok と区別すべきと見なした用法である。先行訳も同様の理解を採用している<sup>13</sup>。

#### 3.2 「観る」ava-√lok の用例

以下に、「観る」という意味に相当する ava-√lok の用例を集め、Mv に現われる順番通りに、それらを示した。本稿で特に問題とするのはこの用法である。

- 用例 1 「十地 (総説)」 Mv ed. Senart I 75.3.

阿羅漢たちが聴衆の心を観る

「勝者の子等は、衆会の〔者たちの〕心を観なさい (Sa: avalokayatha, Sen: avaloketha). そして、ある人にあることに対する〔疑いが〕 そうある場合には、疑いを尋ねなさい」<sup>14</sup>

- 用例 2 「第四地」 Mv ed. Senart I 103.5.

初地から第七地の菩薩たちが観られる

君よ、頭陀法を保つ者よ、この不退転を定めとする彼ら菩薩たちは、七つの地において (中略) 力を具足する者となり、〔凡夫たちによって〕仰かされるべき者 (ullokaniyās) となり、〔正等覺者たちによって〕観られるべき者 (avalokaniyās) となり、礼拝されるべき者となり (中略) 偉大な力を持つ者となり、偉大な輝きを持つ者となる<sup>15</sup>。

<sup>11</sup> Cf. 平岡 [2010a: xii, note. 3] .

<sup>12</sup> Cf. Mv ed. Senart II 272.7–9. *rājā śrutvā utkanṭhito evaṃ jāto* (Sa: *jītoḥ*) // *anamgaṇo gṛhapati mamato aprcchitvā anavaloketvā* (Sen: *anavalokitvā*) *abahumānaṃ kṛtvā bhagavato sakāśam upasamkrānto bhagavāṃ ca nimantrito / asādhum etaṃ* //

<sup>13</sup> Cf. Jones [1952: II 255, note. 3] , 平岡 [2010b: 13] , 平林 [2014: 283–284] .

<sup>14</sup> Cf. Mv ed. Senart I 75.3–4. *avalokayatha* (Sen: *avaloketha*) *jñātmajās cittāni* (Sen: *cittāni ya*) *pariśayā* (Sen: *pariśayām*) / *saṃśayaṃ ca pariprecchatha yasya yatra tathā bhaved iti* //

この箇所については Tournier [2017: 468] による精緻な校訂がある。

<sup>15</sup> Cf. Mv ed. Senart I 102.15–103.7. *ye ime bho dhutadharmaḍhara bodhisatvā avaivartikadharmā te saptasu bhūmiṣu na* (Sa: *na* is omitted) *kathaṃcit kiñcit kadācit yadrecchayā nirayaṃ pi gacchanti* (Sa: *gacchatim*) *tiryagyonim vā gacchanti daridrā vā bhavanti durbalā vā* // *atha khalu brāhmaṇā bhavanti pratyekabrāhmaṇā* (Sa: *-brāhmaṇo*) *vā indrās ca upendrās ca yakṣādhipatayaś ca yakṣās ca nāgās ca nāgarājānās ca gandharvā gandharvādhipatayaś ca* (Sa: *ca* is omitted) *cakravartinaś ca balacakravartinaś ca* (Sen: *balacakravartinaś ca* is omitted) *prādeśyās* (Sa: *prāthavyās*) *ca rājānaḥ agrāmātyās ca śreṣṭhinaś ca janapadapradhānās cāgrāmikās ca* (Sen: *cāgrāmikās ca* is omitted) *rājaputrās ca*

ここでは、ava-√lok という動詞が「仰ぐ、見上げる」という意味を持つ動詞 ul-√lok と並べて用いられている。BHSD (s.v. avalokanīya) は Mv のこの箇所での avalokanīya なる語を“*worthy of (admiring) contemplation*”と解している。仏教梵語 ava-√lok に対応する巴語 o-√lok が「見下ろす」という、ul-√lok 「見上げる」と対比的な意味を持つことから<sup>16</sup>、この箇所も二つの動詞が対比されているように思われる。ここは、凡夫及び第八地以上の正等覚者にはない、初地から第七地の菩薩たちの特徴を述べている箇所であるから、ava-√lok の観察主体は上述の訳文で補ったように正等覚者であると見做すべきだと思われる。

○ 用例 3 「第十地」 Mv ed. Senart I 142.12.

釈迦が兜率天から現世を観る

前世で善根を積み重ね、功德の集積を有する勇者は、兜率天の住居から死没するとき、  
〔世間を〕観た、〔すなわち、〕よく観察した (Sa: avalokayati atīśay' olokayati, Sen: avalokayati atīśayen' olokītāni) <sup>17</sup>.

この後、どこに生まれるべきか釈迦の思案が続くため、文脈から ava-√lok の行為対象は「世間」程になるだろう。

○ 用例 4 「第十地」 Mv ed. Senart I 157.12.

出家に際して、釈迦がカピラヴァストゥを観る

最上の街から出奔して、人中の獅子（釈尊）は〔振り返って〕観た (avalokayī). 「老死の彼岸に達せねば、二度とお前（カピラヴァストゥ）には入らない」と<sup>18</sup>.

巴語の辞書 Cone [2001: 252, s.v. avaloketi] や十二世紀の巴語の文法書 Saddanīti (= Sadd) によれば、ava-√lok は「振り返って観る」程の意味を持ちうるという<sup>19</sup>。文脈上、ここはその用法と考えられる。ゆえに、最上の街（カピラヴァストゥ）が観察対象と考えて良いだろう。

○ 用例 5 {諸仏の特性} Mv ed. Senart I 158.11.

菩薩たちはあらゆる所を観る

一切見性を得たならば、菩薩たちが観たい (avalokayitum) と願う限りの場所に対しては、その見は妨げられずに活動する<sup>20</sup>。

śreṣṭhiputrās ca agramahiṣiputrās (Sa: *agramahisyāputrās*) ca nāyakās ca sarvaśauryavīryās ca prāsādikās ca (Sen: *prāsādikās* ca is omitted) bhavanti balasampannāḥ ca bhavanti ullokaniyās cāvalokaniyās cābhivandaniyās cādeyavākyaś ca bahujanapriyās ca bahujanakāntās ca bahujanamanāpās ca saṃkīrtaniyās ca prahlādaniyās ca mahādhanaś ca mahāvibhavaś ca mahāparivārāś ca mahotsāhā mahātejaś ca bhavanti // (下線部のみ本文で訳した)

<sup>16</sup> Cf. Cone [2001: 589, s.v. oloketi] .

<sup>17</sup> Cf. Mv ed. Senart I 142.11–12. tuṣitabhavanā śirighano purimakūśalamūlasamṇayo vīraḥ / avalokayati atīśay' olokayati (Sen: *atīśayen' olokītāni*) cyavanakāle (Sa: *cavanakāle*) //

<sup>18</sup> Cf. Mv ed. Senart I 157.12–13. niṣkramya nagaravarāto avalokayī (Sen: *avalokayī puravaram*) puruṣasimho / na tvām (Sen: *taṃ*) puna (Sen: *punar ahaṃ*) pravakṣyam aprāpya jarāmaraṇapāram iti //

<sup>19</sup> Sadd には以下のように記される。「avalokana とは、〈象のような観察を…観察して〉などの場合のように、上半身を捻って〔後ろを〕観ることである」(Sadd 520.13–15: avalokanan ti “nāgāvalokitam ... avaloketvā” ti ādisu viya purimakāyāṃ parivattetvā pekkhanam.) これは DN II 122.5 の nāgāpalokitam なる語を引用して説明したとされる。

<sup>20</sup> Cf. Mv ed. Senart I 158.10–11. prāpte ca sarvadarśitve bodhisatvā yāvattakam (Sa: *yāvattakam*) avakāśam avalokayitum icchanti taṃ darśanam tatra apratihatam pravartate //

- 用例 6 「燃燈仏の歴史」 Mv ed. Senart I 198.16.

燃燈仏が兜率天から現世を観察する

〔燃燈仏〕菩薩は死没に際して観察した (avaloketi), 「私はどこに生まれようか. この転輪王は福德をなし高貴であり四大洲の支配者である. この者は私の父として相応しい」<sup>21</sup>

用例 3 のものと全く同じ用法である.

- 用例 7 「燃燈仏の誕生」 Mv ed. Senart I 221.20.

燃燈仏が周囲を観る

そして賢者はアルチマツの家系に生まれてすぐに, この世で七歩歩み, 周囲を見渡して (Sa: avalokayitvā, Sen: samolokayitvā) 笑った, 「今やこれが唯一最後の生まれである」<sup>22</sup>

- 用例 8 「鹿野苑の歴史」 Mv ed. Senart I 359.8; 359.12.

心が繫縛された人が家族や友人を観る

心が繫縛された人は子供たちや友人たちを見て (avalokayanto), 〔真実〕義を失う. 子供を求めるな. どうして友を〔求めるべきだろうか〕. 犀の角のようにただ一人歩め.  
心が繫縛された人は親戚たちや友人たちを見て (avalokayanto), 〔真実〕義を失う. 親戚を求めるな. どうして友を〔求めるべきだろうか〕. 犀の角のようにただ一人歩め<sup>23</sup>.

CPD (s.v. o-loketi) によれば, 巴語 o-vlok には「世話をする, 面倒を見る」程の意味があるという. ここでは確かに avalokayanto という語が「世話をする」に近い意味で用いられており, 出家者にとってはネガティブなニュアンスが含まれていることが分かる.

- 用例 9 「ガウタマ降誕」 Mv ed. Senart II 2.17–18.

釈迦が兜率天から現世を観察する

菩薩は観察した (avaloketi), 「私はどこに生まれようか. このシュッドーダナ王は私の父として相応しい」<sup>24</sup>

この用例は燃燈仏の誕生を記した用例 6 とパラレルである.

- 用例 10 「ガウタマ降誕」 Mv ed. Senart II 24.7.

降誕直後, 釈迦が周囲を観る

そして賢者は釈迦族の家系に生まれてすぐに, この世で七歩歩み, 周囲を見渡して (Sa: avalokayitvā, Sen: samolayitvā) 笑った, 「今やこれが唯一最後の生まれである」<sup>25</sup>

この用例も燃燈仏の誕生を記した用例 7 と平行する.

<sup>21</sup> Cf. Mv ed. Senart I 198.16–17. bodhisatvo cyavanakāle avalokayaṭi kahim upapadyāmi // ayaṃ (Sen: *ayaṃ arcimo*) rājā kṛtapuṇyo (Sen: *katapuṇyo*) mahesākhyo ca cakravartī (Sa: *cakravartī*) caturdvīpādhipatiḥ eṣo mama pitā yogyo //

<sup>22</sup> Cf. Mv ed. Senart I 221.18–21. tato jātāmātre (Sen: *jātāmātro*) kule arcimasya atikramya dhīro padāni iha sapta / avalokayitvā (Sen: *samolokayitvā*) diṣaṃ (Sen: *diṣaṃ*) ūhasāsi (Sa: *ūhasame*) ayaṃ dānim eko bhavo (Sa: *bhava*) paścimo ti //

<sup>23</sup> Cf. Mv ed. Senart I 359.8–15. putrāṃ sahāyān avalokayanto hāpeti arthaṃ pratibaddhacitto / na putram iccheya kuto sahāyān eko care khadgaviṣāṇakalpo (Sa: *khadga-*) // jñātīṃ sahāyān avalokayanto hāpeti arthaṃ pratibaddhacitto / jñātī na iccheya (Sa: *icche*) kuto sahāyāṃ eko care khadgaviṣāṇakalpo (Sa: *khakhadgavi-*) //

<sup>24</sup> Cf. Mv ed. Senart II 2.17–18. bodhisatvo avaloketi kahim upapadyāmi (Sen: *upapadyāmi*) / ayaṃ rājā śuddhodano mama yogyo pitā //

<sup>25</sup> Cf. Mv ed. Senart II 24.5–8. tato jātāmātro kule śākiyānāṃ atikramya (Sa: *atīkrāmya*) dhīro padāniha sapta / avalokayitvā (Sen: *samolokayitvā*) diṣā ūhasāsi (Sa: *ūhasi*) ayaṃ dānim eko bhavo (Sa: *bhava*) paścimo ti //

○ 用例 11 「アシタ仙の占相」 Mv ed. Senart II 35.9.

アシタ仙が閻浮提を觀察する

その聖仙（アシタ仙）は閻浮提全土を天眼によって觀察した (olokayi), この方が釈迦族の家系に生まれたシュッドーダナの息子であると見た (addasa) <sup>26</sup>.

○ 用例 12 「シリ本生話」 Mv ed. Senart II 91.18.

神格が周囲を觀る

そのとき, [海水を全て汲み出そうとする青年僧に] 怯えた神格 (devatā) が海から出てきた. [そして] 四方を (caturdiśam) 觀た (vyavalokayati), その[神格]は[海水を]汲み出そうとする青年僧を見た (addasāsi) <sup>27</sup>.

○ 用例 13 「キンナリー本生話」 Mv ed. Senart II 102.1–9.

マノーハラー（ヤショードラーの前生）がスダヌ（釈迦の前生）を振り返り觀る

あらゆる裝飾に彩られ, 高級な油を塗り, 萎れていない良い匂いの花輪を持つキンナリーのマノーハラーが, 何度も繰り返し後ろを向きながら [振り返って] 觀つつ (avalokayanti) 遠くからやって来るのを, 彼ら (獵師の息子たち) は見た. 彼らは, 彼女がキンナリーであることに気づいた. 彼らは合掌礼拝して, 問うた. 「彼女は進みながら [振り返って] 觀て (Sa: avaloke, Sen: avalokesi), [振り返って] 觀ながら (Sa: avalokenti, Sen: avalokenti) 進んでいる. 貴婦人よ, あなたは何故 [振り返って] 觀るのか (avalokesi), また何処に行くのか」と. マノーハラーは言った. 「私は二つを希求しています. [夫と] キンナラの都城とを. 私はスダヌを [振り返って] 觀て (cāvalokemi), ニラティ (キンナラの都城) に行こうとしています」 <sup>28</sup>

マノーハラーが眼差しだけは夫のいる人間の街に向けながら, 歩みは故郷に向かっていくという場面である. これも用例 4 と同じく, 振り返って觀る ava-√lok であろう.

○ 用例 14 「偉大なる出家」 Mv ed. Senart II 157.16–18.

王子時代の釈迦は, 同族の女を觀ることさえしなかった

その涅槃を禪思していた [シッダールタ] 王子は, 釈迦族の女ムリギーを觀ることも (nāvalokitā) 話すこともしなかった. このとき, その釈迦族の女ムリギーには落胆が生じた. 「これ程の人の集まりの中で私は王子を褒め称えたのに, この方は私を觀ること さえしなかった (na...avalokitāpi)」 <sup>29</sup>

<sup>26</sup> Cf. Mv ed. Senart II 35.9–10. so sarvaṃ jambūdvīpaṃ (Sen: jambud-) olokayi (Sa: olokayā) divyalocanehi ṛṣi / addasa (Sa: addasehi) śākyāna kule jāte (Sen: jāto) śuddhodanasuto yaṃ //

<sup>27</sup> Cf. Mv ed. Senart II 91.17–20. atha devatā uggami sāgarāto saṃtrastā vyavalokayati caturdiśam / sā addasāsi mānavam (Sa: mānavam) utsahi (Sen: utsahantaṃ utsāhitaṃ) kṣapitu (Sen: kṣapayitum ca) sāgarāṃ //

<sup>28</sup> Cf. Mv ed. Senart II 102.1–9. tehi dṛṣṭā (Sa: dṛṣṭvā) manoharā kinnarī dūrato āgacchanti sarvāṃkāravibhūṣitā akṣudrānulepanā (Sa: adrānulepanā) amilānagandhamālyā punar punaḥ pṛṣṭhatomukhī avalokayanti āgacchanti // tehi sā kinnarī pratyabhijñātā // te kṛtāmjaliputā pranipatitā (Sa: pranipatitā) prechanti // gacchanti avaloke (Sen: avalokesi) avalokenti (Sen: avalokenti) gacchati (Sen: gacchasi) / kiṃ bhadre avalokesi kaḥim vā tvam gamiṣyasi // manoharā āha // ubhayaṃ abhiprārthemi \_\_ kiṃpuruṣanagaraṃ / sudhanuṃ cāvalokemi niratiṃ cābhiprārthayet (Sen: -thaye) //

“\_\_”で示した箇所には, 本稿の注 (Mv ed. Senart II 516) と英訳 Jones [1952: II 99, note. 1] に従って, ここに patim (夫) という語を補って本稿の訳文にも反映させた.

<sup>29</sup> Cf. Mv ed. Senart II 157.16–18. kumāreṇa taṃ nirvāṇaṃ dhyāyantaṃ mrgī śākyakanyā nāvalokitā nābhāṣṭā // tasyā dāni mrgīye (Sen: mrgī) śākyakanyāye daurmanasyaṃ saṃjātaṃ // ettakasya janakāyasya madhyato mayā kumāro abhistuto na cāneṇa ahaṃ avalokitāpi //

○ 用例 15 「偉大なる出家」 Mv ed. Senart II 164.8–11. II 164.12.

出家に際して、釈迦がカピラヴァストゥを観る

都城の神格が進みつつある菩薩の前に立って、憂いながら言った。「象よ、象よ、私を観てください (avalokayāhi). 獅子よ、獅子よ、私を観てください (Sen: avalokayāhi, Sa: avalokiyāhi). 優れた力を持つ者よ、私を観てください (avalokayāhi). 隊商主よ、私を観てください (avalokayāhi)」釈迦族に喜びを生じさせる獅子の如き人は、カピラと呼ばれる〔街〕から出て行き、最高の街を〔振り返って〕観て (avalokiya) 次のような声を発した。「たとえ地獄に落ちようと食事を食べて毒を食らうに至ろうとも、老死の彼岸に達せねば、私は決して〔この街には〕入らない」<sup>30</sup>

用例 4 に類似した用法。出家に際して故郷を観る用例である。

○ 用例 16 「猿本生話」 Mv ed. Senart II 248.11.

ワニ（魔の前生）が猿王（釈迦の前生）たちを見る

そのときその猿は、そのワニに喜んで尋ねた、「私たちに会いに (avalokayitum) くるのがずいぶん久しぶりなのはどういうわけだ。元気かい。体が悪かったのではないだろうね」<sup>31</sup>

先行訳である平岡 [2010b: 452] も、この箇所 の avalokayitum という語を「会いに」と訳している。

○ 用例 17 「観察経〔別〕」 Mv ed. Senart II 294.2.

菩提座で、釈迦は象のように観た

世尊が菩薩であられた頃に、菩提座に近づかれ菩提座に留まれ〔そこでなされた〕象のような観察 (nāgāvalokitam) を、一切世間の利益のため、一切世間の安楽のために、どうか世尊はお示してください<sup>32</sup>。

比丘によるこの請願の後、釈迦牟尼世尊の口から降魔成道を中心とした仏伝が語られているのが当該箇所の文脈であるから、確定は難しいものの釈迦が悟るまでの経緯が観察対象であると読める。ところで、「象のような観察 (nāgāvalokita)」という語については本稿脚注 19 で引いた Sadd (520.13–15) にも言及があり、また Mv 内でも用例 19 にこの語が見られ、そちらでも振り返っての観察と理解できることから、この箇所も振り返っての観察すなわち釈迦の回想を指示すると解釈することも可能かもしれない<sup>33</sup>。

<sup>30</sup> Cf. Mv ed. Senart II 164.8–15. nagaradevatā bodhisatvasya gacchataḥ purataḥ sthitvā dīnmanā āha // nāga (Sa: nāgā) nāga avalokayāhi me simha simha (Sa: -āhi me simhaṃ simhaṃ) avalokayāhi me // satvasāra avalokayāhi (Sa: avalokiyāhi) me sārthavāha avalokayāhi me // kapilāhvayāto (Sa: -hvayāto) nirgamyā avalokiyā puravaram puruṣasimho śākyakulānandajanano imāṃ girāṃ abhyudīrayati (Sa: -kyakulana imāṃ girāme 'byudīrayati) // api narakam prapateyam viṣam ca khādetum bhojanam bhujje (Sa: bhujjam) // na tu va aham (Sen: -na tu punar iha) praviśya aprāpya jarāmaranāpāraṃ //

<sup>31</sup> Cf. Mv ed. Senart II 248.9–11. so dāni vānaro taṃ (Sen: taṃ dṛṣṭvā) śuśumārāṃ pratimoditvā (Sa: pratimaṃ moditvā) prcchati // vayasya (Sa: ca yasya) kiṃ dāni sucireṇa (Sa: se cireṇa) āgato asmākam avalokayitum kiṃ kṣemaṃ mā vā kiṃcit śarīrapīḍā āsi //

<sup>32</sup> Cf. Mv ed. Senart II 294.1–3. yad bhagavā (Sen: bhagavatā) bodhisatvabhūtena bodhimaṇḍe (Sen: -mandam) upasaṃkramitvā bodhimaṇḍe sthihitvā nāgāvalokitam (Sen: -mande sthihitvā nāgāvalokitam) sarvalokahitāya sarvalokasukhāya taṃ bhagavāṃ nirdiśatu.

<sup>33</sup> 脚注 19 で述べたように Sadd (520.13–15) が nāgāvalokita という涅槃經に現れる語を上半身を捻って振り

○ 用例 18 「クシャ本生活」 Mv ed. Senart III 27.7.

独覚が家主の妻を観る

そして、入ってきた彼女の家主は、家にその独覚と〔自身の〕妻〔がいのの〕を見た。そのとき、彼には疑いが生じた。「〔この〕出家者は若い。私の妻が、〔彼に〕観られる (olokitā) ことが決してあってはならない」<sup>34</sup>

○ 用例 19 「マハーカーシャパ出家経」 Mv ed. Senart III 55.18.

マハーカーシャパが、地獄に落ちる比丘尼を象のように観る

その時、立ち去ってすぐに具寿マハーカーシャパは、その全身でもって〔振り返り〕比丘尼ストウーラナンダーを象のような観察で観た (nāgāvalokitena ...avaloketi)。そして実に彼女の心を浄めようと、車輪程の大地を周った。だが、比丘尼ストウーラナンダーは心を清めなかった。悪心を抱いた比丘尼ストウーラナンダーは、具寿マハーカーシャパの前で裸を晒し、その直後に命が尽き、それでもなお具寿マハーカーシャパに対する害意があったので、とある大地獄に生まれ落ちたと、これに関してこのように伝え聞く<sup>35</sup>。

○ 用例 20 「五百比丘の羅刹女島救出本生活」 Mv ed. Senart III 75. 2.

木の上から、隊商主が羅刹女たちの都城を観る

そして私は、そのアカシアの木に登り、そのアカシアの木からその都城 (nagaram) を見下ろしたのだ (avalokemi) <sup>36</sup>。

○ 用例 21 「釈子五百人出家」 Mv III 177. 15.

家に留まる者が、疲れた者たちを観る

家に留まる者は、夜明けには起きていて、王に良い夜を与えるべきであり、釈迦族の大

---

返って観ることだと記載する以前にも、Buddhaghosaがその著作Sumaṅgala-vilāsinī(=Sv)の中でnāgāvalokitaの語を解説している。Svでは、仏の骨は貝のように一つに結合しているから、仏は首だけで後ろを振り向くことができないので、象nāgaの様に全身で振り向く必要があるのだと注釈される(但し、Buddhaghosaは仏自身が振り向くのではなく、仏の意志を読み取った大地自体が回転することによって、振り向きの行為が実現されていると解釈する。Cf. Sv II 564.24-565.1)。Saddが上半身を捻って振り向き観ることと解する一方、Svでは全身を以って振り向くことと解されており、多少の差異が認められる訳だが、身体的な振る舞いはさておき、いずれにせよ「後ろを見る」という意味を指示する点では共通の理解をしている。用例15においても、都城の神格が釈迦に「〔振り返って〕観てください (avalokayāhi)」と指示するときに「象よ (nāga)」、「獅子よ (simha)」という呼び掛けが用いられることから、nāgāvalokitaという語が「後ろを見る」ことを含意していると考えていいだろう。渡邊要一郎氏からの私信として、Kāśikāvṛtti 3.3.49などに見られるように、文法学において後続するスートラだけではなく、先行するスートラに対しても効力を及ぼす支配規則の振る舞いを、simhāvalokanyāyaと描写することから、そのような文法文献に現れる箴言を承知していたSadd(520.13-15)が「動物+avalokana(oravalokita)」のアナロジーによって語釈をしている可能性もあるのではとの指摘を受けた。

<sup>34</sup> Cf. Mv ed. Senart III 27.5-7. so cāsya (Sen: cāsya) kuṭumbiko praviṣṭo paśyati taṃ ca pratyekabuddhaṃ grhe bhāryāṃ ca // tasya dāni śaṃkā utpannā / taruṇo yaṃ pravrajito mā heva (Sen: haiva) me kalatrā olokitā bhaviṣyati //

<sup>35</sup> Cf. Mv ed. Senart III 55.18-56.4. aciraprakrānto ca āyusmān mahākāśyapo sarvāvantāṃ tena kāyena (Sen: -kāśyapo sarvāvantena kālena) nāgāvalokitena sthūlanandāṃ bhikṣuṇīm avaloketi api nāma cittam prasādeya tasya cedam śakatacakramātrāṃ prthivīm (Sen: -kramātrā prthivīm) anuparivartte na ca (Sa: -rte na ca na ca taṃ) sā sthūlanandā bhikṣuṇī cittam prasādesi / pradustacittā sthūlanandā bhikṣuṇīye (Sen: bhikṣuṇī) āyusmato mahākāśyapasya santike vivaram adāsi samanantaraṃ (Sa: samanantara) kālagatā ca punar āyusmate (Sen: -smante) mahākāśyape cittam āghāte tvā anyatarasmi (Sen: anyatarasmiṃ) mahānarake upapannā etthaṃ (Sen: evam) etaṃ śrūyati (Sen: śrūyati) //

<sup>36</sup> Cf. Mv ed. Senart III 75.1-2. so haṃ taṃ śīrṣaṃ abhiruhitvā tato śīrṣāto taṃ nagaram (Sen: -rīṣaṃ abhiruhitvā taṃ nagaram) avalokemi //

臣たちにも良い夜を与えるべきであり、疲れた者たちを観て (avaloketavyā), 死者たちには死者への供物を施さねばならない。(後略)<sup>37</sup>

これは用例 8 と同様に「世話をする」「扶養する」程の意味を持つ ava-√lok の用例だ、家に留まる者の一般的な義務についてマハーナーマンが説明する場面である。

○ 用例 22 {多仏経} Mv ed. Senart III 234.12–13; 234.17; 238.6; 239.4.

如来スパートラが法の標を觀察する

「アーナンダよ、如来・正等覚者であるスパートラは法の標を觀察しつつ (avalokayanto) 百劫の間、世間にずっと留まった。彼は如来ヴァルナに授記した」

世尊はこのように述べた。そして善逝はこのように述べた後、師は以下のように言った。

「最高の利益と憐愍を持つ師スパートラ、彼は法の標を觀察しつつ (avalokayanto) ちょうど百劫の間ずっと留まった。そして三十二劫那由多の人々を導いた」<sup>38</sup>

○ 用例 23 {多仏経} Mv ed. Senart III 246.3.

ヴィパシン仏が世間を觀察する

勝者ヴィパシンは正等覚して、世間を觀察し (Sa: oloketva, Sen: oloketi) 獅子の理法を見て (Sen: dr̥ṣtvā, Sa: dr̥ṣṭi), それ故にヴィパシンという名称が生じた<sup>39</sup>。

○ 用例 24 「ラーフラの出家」 Mv ed. Senart III 259.7.

釈迦仏に近づく前に、ラーフラが母ヤショダラーを觀る

ラーフラは母を觀ながら (avalokayanto) 善逝を凝視した (nidhyāyati)<sup>40</sup>。

この後、釈迦仏こそが自らの父であることを知ったラーフラが、ヤショダラーの強い引き止めを振り切り出家していくという文脈を考慮すると、出家前に故郷を觀るという用例 4、用例 15 に似る。

○ 用例 25 「トラブシャとバツリカ」 III 303.12.

トラブシャとバツリカは周囲を觀察する

何らの危険、獅子の危険・虎の危険・豹の危険・犀の危険・象の危険・森火事の危険・洪水の危険・盗賊の危険がない道、それを通して彼らは進み運ぶのである。そしてその牛たちが運ぶことをしない時、彼ら商人たち(トラブシャとバツリカ)は危険があるだろうとこのように〔考えて〕装備を整えて、四方に共に走り始めて周囲を觀察して

<sup>37</sup> Cf. Mv ed. Senart III 177.13–15. gr̥ham adhyāvasantena kalyato yeva utthitena (Sen: evotthitena) rājño sukhārātrī dātavyā śākyamahattarakānām (Sa: -rakānām) api sukhārātrī dātavyā ye pi klānā (Sen: kāntā) te pi avaloketavyā kālagaṭānām pi mṛtakaraṇīyehi sthātavāṃ ...

ava-√lok の行為対象となる語が Sa 写本では klānā という不可解な語であり、Senart の校訂本では「愛する者たち (kāntā)」と置かれる。Senart がこの箇所にも B 写本の krāntā という異読を指摘していることから、Sa 写本の klānā という語を klāntā の誤記であると解して本文は訳した。

<sup>38</sup> Cf. Mv ed. Senart III 234.12–19. supātro ānanda tathāgataḥ samyaksaṃbuddho dhammanetṛim (Sen: -netṛim) avalokayanto pratipūllam kalpaśaṭam (Sen: -kayanto paripūṇakalpaśaṭam) loke (Sen: loke is omitted) asthāsi // sa (Sa: sa is omitted) varuṇam tathāgataṃ vyākāśit // idaṃ avocad bhagavān idaṃ vaditvā sugato (Sen: sugato is omitted) hy athāparam etad uvāca śāstā / supātraśāstā paramahitānukampako so dhammanetṛi (Sen: saddharmanetṛim) avalokayanto / asthāsi so kalpaśaṭam anūnakaṃ dvātriṃśa (Sen: dvātriṃśat) koṭṭinayutā śrāvakānām (Sen: śrāvakānām is omitted) vinesi //

<sup>39</sup> Cf. Mv ed. Senart III 246.3. abhisambudhyitvā (Sen: -va) jino oloketva vipaśyī (Sen: -no oloketi vipaśyī) yaṃ lokam / keśaridharmaṃ dr̥ṣtvā (Sa: -kaṃ veśaridharmaṃ vṛṣṭi) tena vipaśyīti abhū (Sen: abhu) samjñā (Sa: samajñā) //

<sup>40</sup> Cf. Mv ed. Senart III 259.7. mātaram avalokayanto nidhyāyati rāhulo sugataṃ //

(avaloketvā) (後略)<sup>41</sup>。

この後、トラプシャとバツリカは髪塔と爪塔をつくるようにと釈迦から命じられ、髪と爪を受け取っている<sup>42</sup>。

以上、検討してきたことは、次のような表としてまとめることができる。

用例番号	観察主体	観察対象	備考
用例 1 「十地（総説）」	阿羅漢たち	衆会の疑心	十地
用例 2 「第四地」	(正等覚者)	菩薩たち	十地
用例 3 「第十地」	釈迦	(転生後の世間)	十地 仏伝、降誕
用例 4 「第十地」	釈迦	(カピラ城)	十地 仏伝、出家
用例 5 「第十地」 {諸仏の特性}	菩薩たち	場所 (avakāśa)	十地
用例 6 「燃燈仏の歴史」	燃燈仏	(転生後の世間)	仏伝、降兜率 用例 3 と類似
用例 7 「燃燈仏の誕生」	燃燈仏	方々 (Sa: diśaṃ, Sen: diśāṃ)	仏伝、降誕
用例 8 「鹿野苑の歴史」	心が繫縛され た人	子供、親戚や友人	犀角の偈
用例 9 「ガウタマ降誕」	釈迦	(転生後の世間)	仏伝、降兜率 用例 6 と平行
用例 10 「ガウタマ降誕」	釈迦	方々 (diśā)	仏伝、降誕 用例 7 と平行
用例 11 「アシタ仙の占相」	アシタ仙	閻浮提全土	仏伝、降誕
用例 12 「シリ本生話」	神格	四方 (caturdiśaṃ)	ジャータカ
用例 13 「キンナリー本生 話」	マノーハラー (ヤショーダ ラーの前生)	スダヌ (釈迦の前生)	ジャータカ

<sup>41</sup> Cf. Mv ed. Senart III 303.9–12. yatra mārge na (Sen: na is omitted) kiṃci (Sen: kiṃcid) bhayo bhavati sīṃhabhayo vyāghrabhayo dvīpibhayam vā gaṇḍakabhayaṃ vā hastibhayaṃ vā vanadavabhayaṃ (Sen: vanadevabhayaṃ) vā udakavāhabhayaṃ (Sa: udakavāhabhayaṃ) vā caurabhayaṃ vā tatra tena (Sen: te na) gacchanti ta vahanti yatra velaṃ te ca balivardā na vahanti (Sen: gacchanti ta vahanti yatra velaṃ te ca balivardā na vahanti is omitted) tato (Sen: tataḥ) te vāṇijakā jānanti bhayaṃ bhaviṣyati tathā sannahitvā (Sen: saṃharitvā) caturdiśaṃ saṃpradhāvanti (Sen: pradhāvanti) samantena avaloketvā //

<sup>42</sup> Cf. Mv ed. Senart III 310.7–13.

用例 14 「偉大なる出家」	釈迦	釈迦族の女 ムリギー	仏伝, 出家前
用例 15 「偉大なる出家」	釈迦	都城の神格, カピラ城	仏伝, 出家
用例 16 「猿本生話」	ワニ (魔の前生)	猿たち (釈迦の前生)	ジャータカ
用例 17 「観察経〔別〕」	釈迦	(降魔までの経緯)	経
用例 18 「クシャ本生話」	独覚	家主の妻 (スダルシャナーの前生)	ジャータカ
用例 19 「マハーカ ーシャバ出家経」	マハーカーシ ャバ	比丘尼 ストウーラナンダー	経
用例 20 「五百比丘 の羅刹女島救出本 生話」	隊商主	都城 (nagara)	ジャータカ
用例 21 「釈子五百人出家」	家に留まる者	疲れた者たち, あるいは愛する者たち (Sa: klānā, Sen: kāntā)	在家者の義務に ついての一般論
用例 22 {多仏経}	如来スパート ラ	法の標 (dharmanetri)	経
用例 23 {多仏経}	ヴィパシン仏	世間 (loka)	経
用例 24 「ラーフラの出家」	ラーフラ	ヤショードラー (mātara)	ラーフラの出家
用例 25 「トラブシャとバ ッリカ」	トラブシャ, バッリカ	周囲 (samantena)	仏塔建立の物語

#### 4 考察と結論——上位者から下位者への眼差し

上記の用例表から気がつかれる事柄をいくつか指摘したい。

先ず、観察主体が仏教的世界観における上位者として描かれる用例が非常に多いということである。特に備考の欄に「十地」「仏伝」「経」と記した用例においては、殆ど全ての avāṣṭok の行為主体は仏・菩薩・仏弟子などである。用例 1-7, 9-10, 14-15, 17-19, 22-24 の全 25 例中 17 例において、観察主体には釈迦・燃燈仏・阿羅漢・仏弟子などの宗教的階梯における上位者が置かれる。用例 11 の観察主体はアシタ仙、用例 12 では神格、用例 25 ではトラブシャとバッリカであるが、観察主体に上位者を置きがちな他の用例の傾向から翻れば、この三者はいずれも普通の人間と呼ぶことが難しいものと思われる。すなわち、用例 12 の神格が一般者ではないのは当然だが、用例 11 の観察主体アシタ仙は釈迦仏が開悟することを

予言、授記する聖仙であり、用例 25 のトラブシャとバツリカは仏塔建立者として描かれ、いずれも只人ではない。このような整理を踏まえれば、実に全 25 例中 20 例が ava-√lok の行為主体として特別な、あるいは上位の人物を置いていることが分かる。すると ava-√lok の基本的な意味合いとして、上位者の眼差しというニュアンスがそこに表出しているようにも思われる。

しかし、只人でありながら観察主体として置かれる用例も五つある。特に用例 8 と用例 21 は明らかに観察主体が在家者である。在家者が扶養家族の「面倒を見る」程の意味合いで ava-√lok が用いられている。これは CPD (s.v. oloketi) が巴語 o-√lok の用法として回収しているものであり、用いられ方としては何らの不自然もない。いずれも物語の地の文ではなく、一般論・説明の中に現れる用例だが、先述した宗教的上位者の眼差しとしての ava-√lok とは区別が必要であろう。また、観察主体に普通人が置かれる残りの 3 例は用例 13, 16, 20 であるが、いずれもジャータカである。ジャータカの語法は観察主体に関してだけでなく、観察対象についても他の用例の場合と違うようであるので、これについては後述したい。

次に、観察対象に置かれる語を鑑みると、これは世間(loka)や都城(nagara), 周囲(samantena)といった、場所や空間を指示する言葉が多い。全 25 例のうち 13 例が、空間を観察対象として示している(用例 3-7, 9-12, 15, 20, 23, 25)。静谷 [1974: 262], 斎藤 [2011, 2013] は、ava-√lok の観察対象として「世間」が置かれる表現が定型的であることを指摘しているが、これら 13 例はその定型的用法に準ずるものであろう。また観察対象に特定の人物が置かれる場合も少なくない。用例 13, 14, 18, 19, 24 の計 5 例で、特定の人物が観察対象となる。用例 13 「キンナリー本生話」では釈迦の前生であるスダヌという名前の王子が観察対象に置かれているが、残り四つの用例では観察対象は全て女性である。用例 14 では王子時代の釈迦仏から釈迦族の女ムリギーへの眼差し、用例 18 では独覚から家主の妻、用例 19 では長老マハーカーシャパから地獄に落ちる比丘尼ストゥーラナンダー、用例 24 ではラーフラから母ヤシヨダラーへの眼差しとして ava-√lok は機能している。特定の人物が ava-√lok の行為対象として置かれる時、実に 5 例中 4 例で女性が観察対象となっているこの事実は、非常に特徴的である。それ以外の場合には、用例 8, 21 が先述の通り面倒を見られる対象として扶養家族を置き、「十地」の用例 1 で衆会の心、用例 2 で初地から第七地の菩薩たちが観察対象として置かれる。また「猿本生話」の用例 16 では釈迦の前生である猿とその仲間たちが観察され、用例 17 「観察経〔別〕」では不明確なもの、恐らくは降魔に至るまでの経緯が観察対象として置かれ、用例 22 {多仏経} では法の標 (dharmanettri) が ava-√lok の対象になる。

以上のように、観察主体、対象に置かれる語の傾向を鑑みると、仏・菩薩などの上位者が世間などの下位のものを観察するときに、ava-√lok という動詞が用いられる用例の多さが確認でき、上位者から下位者への眼差しとしての ava-√lok という、隠れた語法が存在が印象される。先述したような、仏・独覚・仏弟子から女性への眼差しとして機能する ava-√lok の用例 14, 18, 19, 24 の場合も、観察対象となる女性は文脈上、俗人としての属性が強く、物語では下位者として描かれている。用例 1, 2, 17, 22 では必ずしも世俗的属性の強い観察対象が置かれる訳ではないことには注意しながらも、観察主体が如来・仏であることから、当然ながら観察対象は全て主体より下位であることは明かだろう。ava-という接頭辞が「下方」を

意味することを考慮すれば<sup>43</sup>、この動詞がその原義通り「見下ろす」というニュアンスが表出していると思っても論理の飛躍にはならないと思われる<sup>44</sup>。用例 8, 21 の如き「(扶養家族の) 面倒を見る」程の *ava-√lok* の場合も、観察主体が俗人であるという点で多少異質ではあるものの、「見下ろす」語感とは認められるかもしれない。少なくとも *Mv* の仏伝箇所では、全ての用例の *ava-√lok* が、上位者から世間・俗人(女性)への眼差しとして機能していることは了承されるべきであろう。

しかしながら、上位者から下位者への眼差しとしての *ava-√lok* を、*Mv* 全体を貫く語法であると思倣すことはできない。観察主体と対象の間に何らの上下関係も存在しない次の三つの用例が反証として存在するからである。用例 13, 16, 20 の計 3 例では、マノーハラー(ヤショーダラーの前生)からスダヌ(釈迦の前生)、ワニ(魔の前生)から猿たち(釈迦の前生とその仲間)、隊商主から都城への眼差しとして、*ava-√lok* という動詞が用いられている。いずれにも *Mv* の他の箇所で見られたような、主体と対象の間の明確な上下関係は存在しない。これらジャータカの用例では、他の箇所の場合よりも無制約に、「振り返って見る」「会う」「見下ろす」程の意味で自由に *ava-√lok* が用いられているようにも思える。上述したように、上位者が下位者を「見下ろす」というニュアンスを表出させた動詞として *ava-√lok* を捉えたとすれば、大多数の用例を説明することが可能ではある。しかしだとすれば、これらジャータカの三つの例の言葉遣いが、少なくとも他の多くの用例から見出された語法と多少の距離を持つことを認めなくてはならない。*Mv* の経や仏伝部分とジャータカとの言葉遣いの差異が、何に由来するかここで論証することは適わないものの、少なくともそこに言葉遣いの差異があるということを指摘することはできるのではないだろうか。

\*本研究は JSPS 科研費 17J03494 の成果の一部である。

#### 〈略語及び使用写本、使用テキスト〉

BHSD = *Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary*. See Edgerton [1953].

CPD = *A Critical Pāli Dictionary*. See Trenckner [1924–2011].

Kāśikāvṛtti = *Kāśikāvṛtti*. See Shastri and Shukla [1965–67].

*Mv* = *Mahāvastu*. See Senart [1882–97].

Sa 写本 = Staatsbibliothek zu Berlin/ Preußischer Kulturbesitz, Berlin : No. PSB2. See Yuyama [2001].

Sb 写本 = Staatsbibliothek zu Berlin/ Preußischer Kulturbesitz, Berlin : No. PSB30.2. See Yuyama [2001].

\*特に注記のないパーリ文献と略号は CPD に準拠した。

<sup>43</sup> Cf. Whitney [1924: 396, §1077], Schneider [2004].

<sup>44</sup> 仏教梵語 *ava-√lok* と対応する巴語 *o-√lok* について、Cone [2001: 589, s.v. *oloketi*] も“looks down”という訳語を収録している。また、十二世紀のパーリ文学の大著である *Sadd* (520.10) も「*olokana* というのは、下を見ることである (*olokanan ti hetthā pekkhanam*)」という。

## 〈参考文献〉

### 一次文献

Ed. Senart, É.

[1882–97] *Le Mahāvastu*, 3vols. Paris : Imprimerie nationale.

Ed. Shastri, D. D. and Shukla, K. P.

[1965–67] *Bodhisattvadeśīyācāryajinendrabuddhipādaviracitayā Nyāsāparaparyāyakāśikā-vivaraṇapañcikayā Vidvadvāraharadattamiśraviracitayā Padamañjarīvyākhyayā ca sahītā Śrīmadvāmanajayādityaviracitā Kāśikāvṛttiḥ*, 6vols. Varanasi : Pracya-bharati Prakashanam.

### 二次文献

辛嶋静志

[1998] 「法華經の文献学的研究 (2) 観音 avalokitasvara の語義解釈」『創価大学国際仏教学高等研究所年報』第 2 号, pp. 39–166.

斎藤明

[2011] 「観音（観自在）と梵天勧請」『東方学』第 122 輯, pp. 1–12.

[2013] 「観音（観自在）と『観音経』—鳩摩羅什訳の謎をめぐって—」『法華仏教と関係諸文化の研究 伊藤瑞叡博士古稀記念論文集』山喜房仏書林, pp. 179–189.

静谷正雄

[1974] 『初期大乘仏教の成立過程』百華苑.

平岡聡

[2010a] 『ブツダの大いなる物語 マハーヴァストゥ全訳 上』大蔵出版.

[2010b] 『ブツダの大いなる物語 マハーヴァストゥ全訳 下』大蔵出版.

平林二郎

[2014] 「Mahāvastu における文法の研究—人称代名詞 mamato と mamātu を中心として—」『大正大学大学院研究論集』第 38 号, pp. 264–290.

Cone, M.

[2001] *A Dictionary of Pāli, Part I a–kh*. Oxford : Pali Text Society.

Edgerton, F.

[1953] *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*. New Haven : Yale University Press.

Geiger, W.

[1994] *A Pāli grammar*, translated into English by Batakrishna Ghosh ; revised and edited by K. R. Norman. Oxford : Pali Text Society.

Gonda, J.

[1966] *Loka : world and heaven in the Veda*. Amsterdam : Noord-Hollandsche Uitgevers

- Maatschappij.
- Mayrhofer, M.  
[1986–90] *Etymologisches Wörterbuch des Altindiarischen*, 3vols. Heidelberg : C. Winter.
- Jones, J.J.  
[1949–56] *The Mahāvastu*, 3vols. London : Pali Text Society.
- Karashima, S.  
[2017] “On Avalokitasvara and Avalokiteśvara,” 『創価大学国際仏教学高等研究所年報』第20号, pp. 139–165.
- de Mallmann, M. T.  
[1948] *Introduction à l'étude d'Avalokiteśvara*. Paris : Civilisations du sud.
- Schneider, C.  
[2004] “Syntax und Wortarten der Lokalpartikeln im Ṛgveda IV: III āva,” *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft*. No. 64, pp. 84–130.
- von Staël-Holstein, B. A.  
[1936] “Avalokita and Apalokita,” *Harvard Journal of Asiatic Studies*. No. 1, pp. 350–362.
- Tournier, V.  
[2017] *La formation du Mahāvastu et la mise en place des conceptions relatives à la carrière du bodhisattva*. Paris: École française d'Extrême-Orient.
- Trenckner, V.  
[1924–2011] *A Critical Pāli dictionary*; begun by V. Trenckner ; revised, continued and edited by Dines Andersen and Helmer Smith. 3vols. Copenhagen : A. F. Høst : Munksgaard.
- Whitney, W. D.  
[1924] *Sanskrit Grammar Including both, the classical language and the older dialects of Veda and brāhmaṇa*. Cambridge, Mass : Harvard Univ. Press.
- Yuyama, A.  
[2001] *The Mahāvastu-avadāna in Old Palm-leaf and Paper Manuscripts*, 2vols. Tokyo : The Centre for East Asian Cultural Studies for Unesco.
- Zimmer, H.  
[1922] “Der Name Avalokiteśvara,” *Zeitschrift für Indologie und Iranistik*. No. 1, pp. 73–88.

〈Keywords〉 観察, ジャータカ, 仏伝, ava-√lok, Mahāvastu

さとう よしひろ 東京大学大学院博士課程

## Examples of *ava-√lok* “to observe” in the *Mahāvastu*:

### Who “observes” what?

SATŌ, Yoshihiro

This study aims to organize examples of the verb *ava-√lok* in the Buddhist text *Mahāvastu* of the Lokottara-vādins. This verb root is generally translated as “to observe,” and it can also mean “look after” or “ask for permission,” and also other meaning. It is a popular verb in Buddhist literature; for example, *avalokita* (the past passive participle form of *ava-√lok*) is included in the name of Bodhisattva Avalokiteśvara. Previous studies have mostly referred to this verb only in arguments concerning the establishment of the name “Avalokiteśvara.” These studies have generally taken this verb *ava-√lok* to mean “to observe” in the context of the establishment of the name “Avalokiteśvara.” However, a detailed case-study of *ava-√lok* is currently lacking. Under such circumstances, the verb *ava-√lok*, which frequently appears in Buddhist literature and has a prominent presence, should be examined in more detail. This is the motivation for this study on *ava-√lok*. Although research on such a term should have a broad scope, covering Buddhist texts overall, this study is limited to the *Mahāvastu*, which contains various types of texts such as biographies of the Buddha and Sūtras and Jātakas.

An example survey of the verb *ava-√lok* in the *Mahāvastu* was conducted by examining the context in which this verb is used as well as by listing the subjects and objects taken by this verb. First, the meaning of *ava-√lok* was classified into two types: that which could be understood as “to observe” and that which could not be understood as “to observe.” Second, the subjects and objects that *ava-√lok* tends to have, especially when it is used to mean “to observe,” were investigated. It was found that when it means “to observe,” in most examples (20 of 25 cases), the “observing” subjects tend to be people of a high religious rank, such as Arhat, Śākyamuni, Tathāgata, and stūpa builders. Further, the “observed” objects tend to be words representing space, a secular world, or a woman. (Interestingly, in 4 of 5 cases wherein the object is a person, women are “observed.”) There is a contrast between the subjects and objects of this verb. The “observation” indicated by the verb *ava-√lok* is understood as the gaze of a saint from a higher realm on a lower world. The usage of such a word is natural because of its etymological circumstance according to which the prefix *ava* essentially means “down,” and therefore, *ava-√lok* can also mean “look down.” This is the basic nuance of *ava-√lok*. Furthermore, in two examples (2 of 25 cases), in the words of the Buddha and Mahānāma, persons who stay at home are considered to be “looking after” their families, and so on. Perhaps it is possible to consider that this usage is from the nuance stated above.

However, only three examples (3 of 25 cases) in three Jātakas included in the *Mahāvastu* violate the above mentioned general rule. In these three cases, people who cannot be called saints are “observing” as the subjects of the verb *ava-√lok*. This study finds that the usage of the verb *ava-√lok* is therefore different between the Jātakas and other parts in the *Mahāvastu*, clarifying the general rule and the exception of this verb in the *Mahāvastu*.